トヨタコンファレンスについて思うこと

小長哲郎

My Memories and Views on Toyota Conference

Tetsuro Konaga

第13回トヨタコンファレンスが昨年末に開催され盛会裏のうちに閉幕した。第9回と第13回のトヨタコンファレンスでは事務局を技術的側面からバックアップする意味で，事務局メンバーとして微力ながら活動させていただいた。これらの経験を通して，トヨタコンファレンスの主旨を理解し，この機会を意義あるものとするために，われわれはこれにどのように関与すべきかについて個人的な所見を述べてみたい。この拙文が読者にとって今後の参考になれば幸いである。

すでにご存じのようにトヨタコンファレンスは，自然科学分野における新しい技術の育成と発展に資することを目的として1987年に創立されて以来，毎回，実学的展開が見込まれる基礎的科学技術に関するテーマを取り上げてきている。したがって過去に取り上げられたテーマは自然科学の多岐の分野にわたっており，たとえばここ数年を振り返ってみても，脳神経科学(第9回)，固体表面現象(第10回)，ナノ構造材料(第11回)，植物・農業科学(第12回)，認知と感情(第13回）といったごとくであ る。今年の第14回のテーマは地球環境変動モデリングであり目下開催に向けての企画が進行中である。このようにテーマそのものには連続性はなく，先を見越した話題性の高いものが 討議の対象となっている。これがトヨタコンファレンスの一つの特長でもあり，この基本的な

写真１　本会議参加者の記念写真

考え方は少なくとも本コンファレンスが存続する限り変わることはなかろう。ここにまずわれわれが関与しうる一つの機会がある。これを説明するためにはテーマが決定されるまでの経緯を知る必要があろうがここではそれについては触れない。要はわれわれ一人ひとりが等しくテーマを提案する機会を持っているということである。このところテーマ募集に対する反応が必ずしも活発でないと聞く。奮起を期待したいところである。もちろんこの機会を生かすためには各々が研究分野で先を見越した問題意識をインキュベートしておくことが肝要である。

私がトヨタコンファレンスのテーマとして「認知と感情」を意識し始めたのは4年前の第9回が終わった直後である。この会議では主に知覚，記憶・学習，思考・判断のいわゆる知的機能が討議され，ヒトの行動に大きな影響を及ぼすもう一方の感情的機能への言及が必ずしも十分ではなかった。折しも当時私が所属する研究部で安全性，快適性などに係わる人間分野の強化，推進が真剣に討議され始めていたときでもあった。一方，「行動は感情に裏付けられている」，「個性を生むのは感情である；感情が動機づけをする」といったことや，「わかって（認知）嬉しい（感情）」，「面白くないので（感情）見るの（認知）をやめる（行動）」，「思い出すの（認知）さえつらい（感情）」のような，日常的によく体験することでありながら，まとまりのある研究領域とはなっていない認知と感情の融合現象の枠組みを，色々な側面から討議してえられる成果は，われわれの今後の研究推進に大いに役立つと考えた。

写真 2　ポスター発表風景

少なくとも第9回のときもそうであったが，これまでややもすれば討議課題や招待講演者候補の選定などの会議の内容は組織委員会主導で運営されており，トヨタ自動車や当社の主体的な取り組みが控えめに過ぎた感があった。その反省から第10～12回では組織委員，発表者あるいは討論者として直接的に参加するという形で改善が図られた。これが表に現れるわれわれの関与の仕方の2番目の形態であり理想的な姿である。しかしこのような係わり方は取り上げるテーマとその時点の当社の技術的ポテンシャルと密接に関係しており，毎回この形態がとれるとは思えない。しかし事務局にメンバとして加わり，トヨタあるいは当社にとって実のある方向で委員会に働きかけることは十分可能である。これも関与の仕方の一つの方法である。第13回の場合がこれに当り，事務局側が提案した討議課題の半数を取り込んでいただいた。また本会議の期間中のみ事務局のスタッフとして参加し，受付，映写，計算機室管理などの役割を果たしながら参加者と交流をもつことは，人脈作りの格好の機会でもあり，特にコンファレンステーマに関係の深い部署の若手研究者の参加を薦めたい。

以上，自己研さんの一つの場ともなるトヨタコンファレンスに深い関心を持ち積極的に関与されるよう一文を記したが，事務局としてもそれに対するより一層の工夫と努力が望まれる。

(2000年1月20日原稿受付)